

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第88号 2022年4月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム		
2回目の大学入学共通テストを終えて	吉野 剛弘	2
逸話と世評で綴る女子教育史(88)		
— 自由学園と文化学院 大正自由教育のモデル —	神辺 靖光	5
大東文化大学の卒業生インタビュー		
— 大東文化大学『CROSSING』2022年から —	谷本 宗生	9
明治後期に興った女子の専門学校(43)		
女子美術学校の経営者交代	長本 裕子	12
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 (13):鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科(13)	吉野 剛弘	16
史料紹介 松本深志高校における教育課程の実験的研究(19 57年)その7	富岡 勝	23
実験的文献紹介(36) — 『城右学園48年史』の編纂 —	神辺 靖光	31
刊行要項(2015年6月15日現在)		36
短評・文献紹介		37
会員消息		37

コラム
2 回目の大学入学共通テスト
を終えて

よしの たけひろ
吉野 剛弘
(埼玉学園大学)

今年の1月に実施された大学入学共通テストは、さまざまな混乱の集大成というべき様相を呈していた。コロナ禍の中での実施だったのは昨年と同様だが、不正行為も大々的に報じられたし、いくつかの科目

では大幅な平均点の低下も報じられた。

このように話題に事欠かない今年の大学入学共通テストではあるのだが、本コラムでは少し違った角度から大学入学共通テストについて考えてみたい。平均点の大幅低下と関係するところもあるのかもしれないが(事実そういう声もあるのだが)、試験問題の分量についてである。

大学入学共通テストの導入を機に、一部の教科・科目では問題文の量が増えている。ここで注意を要するのは、問題の量ではなく、問題「文」の量ということである。この点は昨年の最初の大学入学共通テストのときから指摘されていることでもある。今年の試験の平均点低下の一因として指摘する声まである。そして、この傾向が顕著なのは、英語と数学である。

大学入学共通テストも大学入学センター試験も、その問題が翌日の新聞に掲載される。そこで、両者それぞれ2年分の分量を紙面の分量で比較してみたい。正確を期するには文字数の比較が必要だが、大まかなイメージをつかむことを企図してのことである。ここでは、過去4年間の英語と数学を比較してみた。前半2年が大学入学センター試験、後半2年が大学入学共通テストということになる。

『朝日新聞』に掲載された問題を見てみると、4年ともそれぞれの科目が掲載されているページの広告の面積に変わりはなく、毎年5段組で問題を掲載している。そのため、割かれたページ数、段数を数えれば、

その分量を押し量る目安となる。

英語（リスニングは除く）は、すべての年で2ページが割かれている。何の変化もないように思われるが、大学入学共通テストの導入にともない、発音・アクセント問題や、一問一答型の文法問題は姿を消している。明らかに分量は増えている。

数学の方が増加量は顕著である。大学入学センター試験時代は数学2科目（「数学Ⅰ・A」「数学Ⅱ・B」）で1ページを割いており、「数学Ⅰ・A」がおおよそ3段、「数学Ⅱ・B」がおおよそ2段という構成であった。ところが、大学入学共通テスト導入後は、各科目で1ページずつ割かれている。出題傾向にも変化があり、図表が増えている印象はあるが、それを勘案しても目を通さねばならないものは増えているといつてよい。「数学Ⅰ・A」は試験時間が10分延びたが、「数学Ⅱ・B」の試験時間は60分のままである。

つまり、明らかに大学入学共通テストに変わってから分量が増えている。教科の内容について同じ程度の理解度を持つ受験生を想定したときに、早く文章が読めなければ点数が下がる可能性があるということである。

大学入学共通テストは、大学に入学するに値する学力を有しているかを確認する試験である。大学側が文章を早く読める人間を求めているのなら話は変わるが、そう考える大学教員は多くはないだろう（19年間の大学教員生活で、そういうことを言っただけの教員に1人だけ会ったことがあるのだが）。

試験時間も変えないで、問題文の量だけが増えるのだとしたら、つまるところこの試験はいかに早く情報をかっさらうかが問われていることになる。必要な情報を早く適切につかむことは大切なことには違いない。しかしながら、そのような能力はAIやコンピュータの方が上である。Society5.0と称して華々しい未来を謳いつつ、育てているのはシンギ

ユラティにつぶされる運命しか待っていない人間なのだとしたら、何ともやるせない話である。

第62号のコラムで、これからの時代に求められるべきは「how to」ではなく「what to」であり、骨太な人間を作らねばダメであると論じた。情報を早くかささう能力もあいにく「how to」に属する能力である。今一度真摯な議論が必要なのだらうと思わずにはいられない。

***コラム欄では読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(88)

— 自由学園と文化学院 大正自由教育のモデル —

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

大正の時代になってから明治時代とは違った雰囲気や庶民の行動の変化について点描してきた。これまで経験したことのない大都會での生活、交通通信手段の急増と教育・識字能力の拡大によって庶民があらゆる文化を吸収するようになった。長い間に構築された封建制度とその慣習や思想は維新に続く明治時代にほぼ崩壊し、人々は個人の自立・主張を叫ぶようになった。^{しいた}虐げられた女性の場合、それは特に顕著であった。男性と同等の職業、社会的地位を得るために高等専門学校に進学する女子も増加し、また折からのイノベーション(技術革新)の波に乗って新しい職業に就く女性が各地に現れる。これら多様の動態は本誌シリーズの各所で紹介されると思うが、このような大正期の女子教育の中で、最も大正期らしい女子の新教育、一つは旧来の慣習にとらわれない自由な教育、一つは都会の中間層、特に中流女性の目標になった文化生活の名を冠した自由学園と文化学院について述べてみたい。

自由学園は大正10年4月、東京府北豊島郡高田町^{そうしがや}雑司ヶ谷に設けられた各種学校である。設立者は羽仁もと子、羽仁吉一夫妻となっているが、羽仁もと子が創立を決意し、夫の吉一が賛同し、以後、もと子の創意で発展してゆくのである。もと子は南部藩(青森県)士族の生まれ、16歳で上京し東京府立女学校から明治女学校に入学した。そこで『女学雑誌』編集を手伝ったことが彼女の才能を伸ばし『家庭の友』や『婦人之友』『子供之友』などの婦人雑誌や少女雑誌をつくるきっかけになった。やがて報知新聞の当時はめずらしい婦人記者になり、同じ新聞記者の羽仁吉一と結婚した。

羽仁もと子が自由学園をつくろうと決意した動機は興味深い。長女の説子がある日、学校から帰って“今日から算術が小数になったが、それはやさしい。点を打つ所さえ間違えなければできると言った。もと子は考え込んでしまった。整数と

小数は本来、数の世界が違う。その本来の違いを考えないで、計算の手続きや名称を覚えればよいとする教育は間違っている。教科書を覚えればよいとする教育は間違っている。自分で自由に考えねばならない。こうして一人一人が自由に考える学園（学校でない）が頭に浮んだ。これを家族に相談するとまず長女の節子が賛成し、夫の吉一も賛成して自由学園創立が決った。

もと子はまた昼食の弁当が気になった。夏は腐敗の心配があるし、冬は冷たい食事になる。いっそ、生徒が協力して学園で昼食をつくれないうらうか。こうして学園あげての協同炊事昼食がはじまった。学校給食のさきがけてはないらうか。

資金は『婦人之友』などの出版で多少の蓄えがあったので、それを当てた。
あした明日館と名付けられた校舎は帝国ホテルの設計者として高名なアメリカ人、フランク・ライトの設計による。ライトの弟子・遠藤新が羽仁夫妻の通った教会を通じての知り合いだった。この学園は26名の生徒ではじまったが、この26名は『家庭之友』や『子供之友』などの愛読者たちで、少ないながら自由学園は羽仁もと子と理解し合った因縁で結ばれてはじまったものであった。

こうして自由学園は「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」を綱領とし、自主独立の人格を育てる教育を開始した。学科課程は高等女学校の年齢相当につくられているが似て非なるものである。学科目は修身・国語・英語・数学・歴史・地理・理科・芸術科・実際科・体育科の11科目である。修身は「生徒ノ思想及ビ実生活ノ指導」で忠孝だの良妻賢母を思わせるものはなにもない。理科は「自然科学入門・日常生活ニ於ケル科学・自然科学総論」実際科は「家事・作法・習字・裁縫・手芸・料理・手工」で、高等女学校ですでに常識になっていたカリキュラムを大転換した観がある。生徒は教師のアドバイスを受けながら、自主的、自発的に読書から議論からなにかを感じ、考え、自分なりに理解していったのであらう。
さき前に昼食の共同炊事を述べたが、これは自由学園の実践的教育として土曜日を除く毎日、昼食の献立、食材の買出し、調理、皿洗い、掃除、食費分担までの一連の仕事をいくつかのグループごとに行った。生徒の楽しみともなって後年に

続く同学園の伝統になった。このように、この学園の生徒は学園内で対社会的
生活訓練を受けたので、卒業後、消費組合運動や農村セツルメント活動を行う
者が後を絶たなかった。

明治天皇の薨去とともに軍国主義的国家主義の重圧が次第に薄れ、新たに参
戦した世界大戦も地球の一角での小競り合いで漁夫の利を得て国民は明るさ
と軽薄さを獲得した。迫りくる西洋諸国の外圧と内なる頑固な封建的習慣に対
し必死に戦った明治の人々と違うところである。教育の面でみると大正の声を聞
くとすぐに新教育の声があがった。明治期に国家がつくった教育に対する反旗で
ある。まず“児童中心”が叫ばれた。国家→政府→文部省が学校の進学制度・カ
リキュラム・教科書をつくり、それを教える教師を養成したのだから、当面、教師を
敵として児童中心に教育を考えようとする。谷本富、手塚岸衛ら教育思想家が主
張した。次に鈴木三重吉の「赤い鳥」に代表される文学者たちの童謡童話の創
作活動や臨画による個性のない図画を排して子どもの個性を伸ばす山本鼎の
自由画教育の主張があった。しかし文学・美術という限界がある。そして第三に
成城学園や自由学園、明星学園、児童の村小学校のような私立学校があった。
これらは名称はともあれ、校舎を持ち教師と児童生徒がそこに居て学ぶのであ
る。ただ学び方が、文部省が示す教則や教科書に縛られない自由教育なのであ
る。大正新教育の中で最も実質性を持ったのはこれらの学校であろう。これら
の中で女学校といえるものは羽仁もと子の自由学園であったのである。

自由学園創立と同じ大正10年春、東京市神田区駿河台に文化学院が開校し
た。創立者の西村伊作は和歌山県の人、裕福な山持ちであったが東京へ出て
建築家になった。羽仁もと子と同じで長女が小学校を卒業し、中等学校に進学
しようとした時、娘のために自前の学校をつくらうとしたのである。新教育の人た
ちと同じく彼は既存の学校の画一性、官僚臭さが大嫌いだった。西村は学院を
つくるに当たって互いに親友と認めあった詩人の与謝野晶子、画家の石井柏亭
と語り合い、「画一的に他から強要されることなく、個人個人の創造能力を本人
の長所と希望に従って自ら自由に発揮する」学院という目的のもと、与謝野・石

井の両名を学監として文化学院を創立したのである。はじめは尋常小学校卒業を入学資格とする修業年限4ヶ年の中等教育程度の各種学校であった。当初は女子だけを入学させたが、3年目から男子の入学を認め共学が実現した。学科は精神講座・数学・人文科学・日本文学・自然科学・外国文学・美術・音楽及び舞踊・手芸の9科目であるが、配当授業時間は日本文学・外国文学・美術・音楽及び舞踊が圧倒的に多い。因みに外国文学を見れば、英語と仏語にわかれ、英語であれば「英語・会話・名著購読・外国文学史」と授業内容が示されている。

これを教える専任教員には学監の与謝野晶子や石井柏亭、作曲家の山田耕筰が加わり、臨時講師として寺田寅彦、吉野作造、有島武郎、阿部次郎、和辻哲郎、山本鼎、芥川龍之介、菊池寛、北原白秋など著名な文化人、芸術家が顔を揃えた。

西村は官僚的国家体制が嫌いだったが、なんでも画一的にする当時の女学生について“みな裾に白線をつけた袴を着せられた。袴の丈が長いとか短いとか学校の先生はやかましい。髪のかき方も一定の型にしなければならない。女学生をなるべくぶかっこうにするのが教育上いいことだと教育者は思っているらしい。”このような調子なので文化学院には制服はなく徹底的に自由であった。

大正14年には男女共学の大学部を設けた。毀誉褒貶さまざまな世評の中で一定の支持者を得て文化学院は東京駿河台の一角に存在を示していた。そして、昭和の戦時中は当局の弾圧を受け一時閉塞したが、戦後、デモクラシー、自由、文化のムードの中で蘇生した。このムードの中で文化学院に入学した天才女優・高峰秀子は文化学院での話題をふりまき、多くの人に感銘を与えた。彼女のような天才に文化学院はぴったり合った学校であったろう。

参考文献 『東京都教育史・通史編3』

『東京百年史 第4巻』

中野光『大正自由教育の研究』

大東文化大学の卒業生インタビュー

— 大東文化大学『CROSSING』2022年から —

たにもと むねお
谷本 宗生 (大東文化大学)

大東文化大学『CROSSING』2022年から、大東文化大学の卒業生インタビュー(4名 ※便宜上、アルファベットで表記)を紹介したいと思う。まず1人目である、株式会社アリババ勤務A(外国語学部英語学科卒業)は、「目の前のことをしっかりこなす」心がけが大切だという。

「台湾での留学経験から、海外と日本を繋ぐ事業に携わりたいと考えていた自分にとってまさに理想の会社でした。現在は日本の中小企業のお客さまに対し海外販路開拓支援をしております。お客さまからご相談いただき、実際に海外バイヤーとの取引が成立した際はいつも達成感があります。就職活動をはじめたのは3年次の3月からで、留学帰国直後に情報解禁の時期となり焦りを感じておりましたが、キャリアセンターの方からのご支援にとっても助けられました。個別相談での1対1のカウンセリングにより情報が整理され、自分が今やるべきことが明確となりました。在学中は自分がどのような職業に就きたいのか分からない方も多いと思います。私も今の職業を想定して何かをしていたというより、自身の体験の延長線上に今の仕事がありました。大学生活では挑戦できる環境下に自分を置き、目の前にあることをしっかりこなすことが大切だと思います」。

*** **

続く2人目となる、巣鴨信用金庫勤務B(経営学部経営学科卒業)は、大学での「行事は役に立つものばかり」であったという。

「キャリアセンターが開催する行事はすべて参加しました。どれも役に立つものばかりです。とくに模擬面接は、良いところ、直すべきところを具体的に細かく指摘してくださるので、とても役立ちました。ゼミの一環で、簿記やファイナン

シャル・プランニング技能士の資格を取得していたこともあり、キャリアセンターのアドバイザーの勧めもあって金融関係を志望しました。現在は、営業担当として法人・個人のお客さまに、融資のご提案や、資産運用・相続のアドバイスなどを行っております。担当地区には法人のお客さまが多く、金融の本業であるご融資のご提案も多く、大変ではありますが、やりがいがあります。お客さまと信頼関係を築き、どんな小さなことでもご相談いただける…ように頑張ります」。

*** **

そして3人目となる、株式会社東日本旅客鉄道勤務C（法学部政治学科卒業）は、「まずはキャリアセンターに相談」に通うべきだという。

「駅の改札や、みどりの窓口でお客さま対応の業務を行っております。在学中に飲食店のアルバイトで接客をしていたこともあり、その経験が役立っていると感じています。就職活動について何も分からない状態でキャリアセンターを訪ね、エントリーシートの書き方も、自己分析もまったくできていなかったのですが、丁寧に教えていただき、安心して就職活動に臨むことができるようになりました。とにかくキャリアセンターに通い詰めました。通うごとに就職活動に関しての不安が安心に変わっていくのを感じました。鉄道会社を志望したのは、地域に根差した社会貢献度の高い職業と考えたからです。将来は車掌、そして運転士を目指しています。お客さまの安心・安全を第一に、地域のお客さまの生活を支える存在になれたらと思っています」。

*** **

最後の4人目である、学校法人順天堂・順天堂大学医学部附属順天堂医院勤務D（スポーツ・健康科学部健康科学科卒業）は、「専門的な学びと幅広い仲間たちとの交流」が大学時代は大事であるという。

「高校生の時、けがで入院した際に病院の仕事に興味を持ち、進路学習で調べるうちに臨床検査技師という職種を知りました。大東文化大学を選択したのは、医療以外の道を目指す人が多い環境の中で学ぶことにより、自身の見聞も広がり、将来社会に出た時に役立つと考えたからです。健康科学科は総合大学の中の一学科とはいえ、先生方や設備、そして資格取得のための学びも充実していたので、医療系専門の大学と比較してもデメリットを感じたことはまったくありませんでした。現在は、院内の検査業務全般に携わっており、PCR検査も行います。直接患者さんと接する機会の少ない部署ですが、私たちの検査結果が患者さんの治療方法だけでなく、人生を左右する場合もあるため、常に責任感を持って作業しています」。

*** **

卒業生の社会人らが、それぞれの自身の体験や思いを踏まえ、これから就活を行っていく母校の後輩らに向けて、実践的な情報を交えたエールをおくっている。卒業生からの助言には、役立つ実利だけでなく、大学を絆とした愛情ある示唆が自ずと感じられよう。

明治後期に興った女子の専門学校(43)

女子美術学校の経営者交代

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

明治35年1月、佐藤志津は、女子美術学校校主となった。志津は、嘉永4(1851)年12月、下総(現千葉県)にある西洋医学の病院佐倉順天堂・佐藤尚中^{たかなか}の長女として誕生。5、6歳の時漢籍と国学を、9歳の時から穴沢流の長刀を学び、12歳の時免許を得る。幼年期、青年期を通して、当時の一般武士が受けた教育のほか、点茶、琴曲、手芸、礼法など淑女としてのあらゆる修業を積んだ。聡明で、すべてのことにおいてその奥義に達した。その後も、書、禅、謡曲を学び、生涯自身の修養に努めた人格者であった。しかし、自ら学校事業を起こして、日本女性の教育事業を手掛けるという積極的な考えを持っていたわけではなかった。横井玉子から女子美術学校の窮状を救ってほしいと訴えられ、玉子の情熱を感じて、この仕事に一生を捧げようという決意を固めたのである。親戚の大多数から反対され、後に女子美術学校の第三代校長となる夫、当時順天堂医院院長であった佐藤進でさえも反対した。



佐藤志津
(『女子美同窓会の歴史』)

志津は、崩壊寸前の学校を引き受けて、立て直しと発展の方策に思案する日々が続いた。経営を引き受ける条件の一つを、玉子も藤田文蔵も、志津の指揮下でいつまでも本校のために勤めることとした。玉子と藤田にとっては感激この上ない処置であったにちがいない。志津の、すぐれた人材を大事にする考え方が感じとれる。従来組織そのまま、毎日のように志津、玉子、藤田など教職員の首脳が運営方針を協議した。校長は藤田が引き続き務めた。しかし、最終決裁は志津が行なった。最後は自分が責任を取るという覚悟であったのだろう。

志津が校主になったことで、しだいに入学を希望する生徒が増えて、校舎増築の計画を立てることになった。生徒 400 名、寄宿舍 60 名を収容できるように拡張し、35 年度中に完成した。35 年 4 月 1 日、第 1 回卒業証書授与式が挙行された。菊池大麓文部大臣が臨席し、本科普通科計 14 名に卒業証書が授与された。本科普通科は、修業年限 4 年であるが、入学以前の学歴と技術に応じ 1 年の修学によって卒業と認定された。

同年 4 月 25 日、志津は、駒込の自邸に職員を招き盛大な園遊会を催した。秋には全校生徒を自邸の菊見会に招いたり、正月や夏期休暇には帰省しない寄宿生を別荘に招いたりして、生徒との交流の機会を作った。生活を通して個人的教育にも心を配った。こうした志津の配慮により、職員、生徒、卒業生を一体とする家族的な明るい校風が培われていった。

35 年 9 月、蒔絵科は希望者が少なく休科となる。造花、編物科に修業年限 2 年、尋常小学校卒業を入学資格とする別科が置かれた。別科は、作品の製作を目的とし、材料は本校から交付され、授業料、校費、学費は一切免除された。上級学校に行けない女子に、技術を身に着けて自活できる道を用意したのであろう。39 年までは 3 月と 10 月の末日に、年 2 回の卒業式を行った。

女子美術学校の近辺には多くの学校が存在し、学究に恵まれた環境であった。東京帝国大学、第一高等学校、済生学舎、女子高等師範学校、東京女子師範学校、日本女子大学校、同付属高等女学校、女子学院、東京裁縫女学校、日本女学校、淑徳女学校、跡見女学校などがあった。

一方、女子専門学校、高等女学校、女子実業学校など女子の教育機関が充実し、女子学生が増えると、女子の墮落問題が世間の話題にのぼるようになった。下宿の部屋の整頓をしない、言葉遣いがぞんざいである、艶書を出した女学生がいたなどのたわいもないことだが、従順で慎み深いことを第一の婦徳と考えていた当時の人々には、新しい女子学生の生活態度がすべて墮落と映ったのであろう。

35年、読売新聞が1ヶ月にわたり、「女子教育 諸大家の談話」と題する特別記事を連載した。10月19日の華族女学校長細川潤次郎にはじまり、当時の代表的な女子の学校9校の校長10名(うち1名は学監)から「女子学生の墮落問題」について意見を求めた。女子美術学校長藤田文蔵の談話は10月3日から3回にわたって連載された。

(略)此の病根が何れにあるやを取調べて見ると、女学生自身が墮落するのではなくて、他に墮落せしむる者が沢山あるので御座います。先づ近くの大学から高等学校を始めとして、各一般の生徒に、墮落書生なる者が非常に多いので、其れ以上にも、代議士を始め、政治家、実業家等、社会重要の地位に立つ者が、悉く墮落して居る為め、是等の者が直接間接に清浄無垢なる処女をして、墮落せしむるのであります。

などと、「社会の墮落を矯正すべき時期である」こと、「独立自活の精神に富んで、志操鞏固な婦人が一家の主婦となって、良人に仕え、子女を養育して、純潔な家庭を作る」ことが必要であること、女子美術学校も“そういう婦人を作りたいという精神から建設した”ことが述べられた。さらに、徽章に触れ、“単に学校の記号と云う事のみでなく、学校の神聖を表示する為であります”と、開校間もなく、藤田自身が考案した八咫鏡に「美」という文字を書いた徽章が、生徒たちの郊外での行動に自ずと規制をかけていることが述べられた。

しかし、この記事は、自分たちのことを指すものだとして大憤慨した第一高等学校の学生たちが、藤田と、先に同様の趣旨を述べた日本女学校(現相模女子大学の前身)の西沢之助両校長を訪れて激しく抗議し、新聞紙上に誤りを掲載するように強要した。しかし、藤田は応じなかったため、一高生たちが西寮中堅会の名で藤田校長を非難する長い告示を新聞『日本』(明治35年12月6日)に発表するという事件に発展した。

そのような折、玉子が35年12月31日、順天堂医院で佐藤進・志津の手厚い看護のもと、親族、学校関係者に見守られ、寄宿生たちの讚美歌の合唱のうちに永眠した。享年49歳。1月4日、谷中の斎場にて葬儀、1月8日校葬が行

われた。33年9月に胃癌が判明したが、周囲の人々には話さず、女子美術学校設立後、病をおして舎監を務め、経営難を打開するために奔走した無理がたたわり、35年冬病状が急変した。その遺言に、“屍体を解剖に付し、遺骨は教授用として美術学校内に存置す可きことを以てす”とあった。死んでも何かの役にたちたいと願った玉子の気丈な性格がうかがえる。解剖は執り行われたが、遺骨は遺言をまげて谷中霊園の横井時治(左平太)の墓に葬られた。

36年3月28日、第3回卒業証書授与式を挙行し、総理大臣桂太郎夫妻、清浦奎吾司法大臣の臨席のもと、日本画3名、西洋画2名、造花5名、編物4名、刺繍12名、裁縫17名、合計43名という多くの卒業生を送ることができた。

美術学校とはいえ、生徒数は裁縫科が最も多く、次いで刺繍科が多い。玉子の、「美術には家庭を充実させるものすべてが含まれる」という信念が受け継がれていたのであろうが、「女子学生墮落問題」が取りざたされ、32年には文部大臣樺山資紀から、「賢母良妻」としてふさわしい女学生に教育するように、各学校で取締を強化するようにと訓示が出されていた。そうした世情も反映しているのだろう。

37年1月、藤田校長退職。1月28日付佐藤志津が第二代校長に就任した。

参考文献

『女子美術大学八十年史』

山崎光夫『二つの星』横井玉子と佐藤志津 女子美術大学建学への道

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書(13):

鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科(13)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、引き続き鳥取東高等学校より刊行されている『柏葉』に掲載された専攻科修了者の進路を検討する。今号では私立大学の合格者数を検討していく。

私立大学への合格者数は、本論末尾の表の通りである。表の体裁は前号の国公立大学のもと同じで、各地域の合計人数を示すとともに、10回以上合格者を輩出している大学と、他との比較で掲載しておくべき大学の合格者数を示している。各地域の合計人数から個別に示されている大学の合格者数を差し引いたものが、その地域にある他の大学の合格者数ということになる。なお、私立大学は圧倒的に首都圏、近畿圏に集中しているため、専攻科修了者が比較的多く合格している東京、京都、大阪、兵庫については、都府県ごとに示してある。

第86号でも触れたように、鳥取県には2001(平成13)年に公設民営形式の鳥取環境大学が設立されるまで、私立の四年制大学はなかった。1990年代までは、「私立大学への進学=県外への転出」ということになる。

全体的な傾向を見ていくと、1980年代までは東京の大学に合格した者が一番多い。京都、大阪、兵庫を足せば東京より多くなることも多いのだが、この4都府県で大半を占めている1990年代に入ると状況が変わり、東京が減って、大阪が最も多くなる年が増えてくる。さらには、1980年代までは数が少なかった中国や四国、九州も人数が増えていく。年によっては、中国が最も多くなる年も出てくる。1990年代後半からは、大都市圏の大学に合格する者が減少傾向に入ってくる。特に東京の落ち込みは近畿3県より大きく、1990年代後半以降で最も人数が多かった年は、1999(平成11)年と2004(平成16)年のみである。遠くの大学をわざわざ受けない、すなわち地元志向が強まっている。

各地域の状況を見ていこう。北海道・東北と関東、そして九州は、一貫して人数が少ない。1990年代後半以降に地元志向が強まったと先述したが、地理的に遠いため候補として選ばれにくいということであろう。これらの地域で10回以上合格者を輩出した学校は、神奈川大学と福岡大学のみである。

東京はいわゆる有名な大学に多くの年で合格者を輩出している。出現頻度の高い大学は、人数も多いという傾向がある。東京には多くの私立大学があるが、地域的な隔たりもあり、わざわざ受験しようとなると有名どころになってしまうものと思われる。その傍証として上智大学があげられる。関東地方では「早慶上智」と呼ばれるほどに有名なものの、地方での知名度に欠けるとよく言われるが、専攻科修了生も同様の傾向である。理系では「早慶理科大」という言い方もされるが、高等学校の教員に出身者が一定数いると思われる東京理科大学には相応の合格者を出しているのだから、なおのことである。

京阪兵を含む近畿も東京と同様で、いわゆる有名大学に多くの年で合格者を輩出している。この地域の大学群の呼称として「関関同立」「産近甲龍」というものがあるが、その中では微妙な偏りがある。「関関同立」で多いのは関西大学と立命館大学で、「産近甲龍」では甲南大学が明らかに少ない。学校の規模に違いがあるので、何とも言えないところもあるのだが、もし年々受け継がれる伝統があるのだとしたら、非常に興味深い。

このような仮説を立てるのには理由がある。近畿では、女子大にも一定の頻度で相応の合格者を出している。表では3校示してあるが、学校の規模を勘案したときに、複数人の合格者が出ている年が多いように思われる。友人と相談して同じ学校を受けていることが推察されるのだが、この論理を敷衍すれば、先述の偏りも説明できるのではないか。これまでの実績をふまえて同学年の友人同士の間で一緒に受けることを決め、結果的に合格者が出ることで次の年もまた同じなことが起こる、という流れで生じるのではないかと考えられるのである。

中国地方では歴史の長い学校には多くの年で合格者を出している。鳥取と島根には私立大学がほとんどないので、瀬戸内海沿いの3県の大学ということに

なるのだが、物理的な距離は近くとも、結局のところ家を離れるという点に変わりはない。1990年代後半以降に地元志向が高まったと言ったが、瀬戸内3県の合格者が増えているわけでもない。どの道家を離れるのなら、近畿にまで出た方がよいという判断があるのかもしれない。

県内唯一の私立大学の鳥取環境大学の存在は、地元志向の象徴でもある。中国のうちの半分を占めるのが精一杯ではあるが、さまざまな事情から地元を離れられない人の受け皿になったものと推察される。事実、鳥取環境大学は、国立の鳥取大学とともにすべての年に合格者を輩出している。

四国は、国公大学にはコンスタントに合格者を出していたが、私立大学は少ない。もともと私立大学が多いわけではないということもあるのだろうが、地方においては国立大学が圧倒的に高い地位であると認識されていることがそのような違いを生み出しているものと思われる。

これまで四年制大学の合格者を検討してきたが、それ以外の機関に合格した者もいるし、就職した者もいる。次号では、その点について検討していく。

(付記)本研究は科学研究費補助金(20K02435)の助成を受けたものである。

	1979 (昭和54)	1980 (昭和55)	1981 (昭和56)	1982 (昭和57)	1983 (昭和58)	1984 (昭和59)	1985 (昭和60)	1986 (昭和61)
北海道・東北	0	0	0	0	0	0	0	0
関東(一部除く)	3	1	2	3	3	0	2	5
{ 神奈川	1			1	3		2	2
東京	26	27	40	40	33	30	31	41
{ 慶應義塾	1	2				1		
{ 駒澤	2	1	2	1	5	2		2
{ 上智	2	1	1			1		
{ 専修	1		2	3	2	2	2	4
{ 創価		1						2
{ 中央	1	2	3	1	3	1	1	7
{ 東海	1			2	1	1		1
{ 東京農業	4	4	1	4	2	1		1
{ 東京理科	1		1	1	1	3	4	
{ 東洋			1	2	1	1	4	4
{ 日本	2	3	5	5	5	2	4	7
{ 法政	1		2	3	3		2	4
{ 明治	1	3	2	5	1	3	1	
{ 早稲田	1	1	4	3	1	8	1	
中部	1	2	2	3	3	0	0	2
近畿(一部除く)	0	1	3	1	0	0	0	1
{ 奈良		1	3	1				
京都	22	10	29	22	16	9	11	16
{ 京都産業	2	4	4	5	2		2	4
{ 京都女子	2	1	2		1	2	2	2
{ 同志社	4	1	5	4	3	2	1	1
{ 佛教		1	1		2			2
{ 立命館	11	3	10	9	6	5	6	4
{ 龍谷	2		5	3				2
大阪	13	11	25	19	4	6	12	22
{ 追手門学院								2
{ 大阪経済	3	1	3	1			2	3
{ 大阪工業		2	3	3		1	3	1
{ 大阪産業			1	1				1
{ 関西	8	2	7	6	2	1	4	4
{ 近畿	1		5	4	2	4	3	9
{ 摂南								
{ 阪南	1	5		1				
兵庫	3	3	9	7	8	2	6	2
{ 関西学院		1	3	4	4		1	
{ 甲南	2		2	1	1		3	
{ 神戸女子			1					
{ 武庫川女子		1	1					2
中国	0	9	4	7	2	1	0	8
{ 鳥取環境								
{ 岡山商科								2
{ 岡山理科		1						3
{ 広島経済				1				
{ 広島工業		4	2		1	1		
{ 広島修道		2	1	1	1			2
{ 広島文教女子		1	1	1				1
{ 福山				1				
四国	0	0	0	0	0	0	0	0
{ 徳島文理								
九州・沖縄	0	0	0	0	0	0	0	0
{ 福岡	1						3	1

1985(昭和60)年から1988(昭和63)年は「その他」(校名や人数が不記載のためカウントせず)を除いたもの

	1987 (昭和62)	1988 (昭和63)	1989 (平成1)	1990 (平成2)	1991 (平成3)	1992 (平成4)	1993 (平成5)	1994 (平成6)
北海道・東北	0	0	0	0	0	1	1	0
関東(一部除く)	3	1	4	9	4	4	2	3
神奈川	3		1				1	1
東京	22	22	16	9	14	13	26	10
慶應義塾		2			1			
駒澤		2	1				1	
上智		1		2				
専修		1			1		3	
創価		3	1				2	2
中央		1	2	1			5	
東海		1			1			
東京農業							1	
東京理科		2	3	3	1	4	3	1
東洋		2	2	1	3			
日本		2	4	2		1	1	2
法政		1	1		1	1	2	1
明治				1	2	1	2	
早稲田			5		1	2	1	
中部	0	2	4	3	5	2	4	3
近畿(一部除く)	0	4	1	2	4	0	5	0
奈良			3			4	2	
京都	13	10	15	7	10	12	19	24
京都産業		4	2	2	3	2	1	8
京都女子		1				1	2	
同志社		3	3	1	1	2	1	
佛教		2						
立命館		3		9	4	1	10	9
龍谷		1	1			5	3	4
大阪	9	9	7	17	22	13	38	20
追手門学院			1	1	2	3	1	2
大阪経済		1		1	1		2	2
大阪工業		1	1			3		
大阪産業				1	1		1	
関西		3	4		2	3	7	7
近畿		5	3	2	3	6	3	9
摂南				2	1	2	1	1
阪南			1			1	8	
兵庫	3	6	3	6	10	13	10	2
関西学院		3	1				4	1
甲南			2	1	1		1	1
神戸女子					2	4	1	
武庫川女子				3				
中国	0	4	6	9	24	19	19	16
鳥取環境								
岡山商科			1	2	6	4	5	5
岡山理科				3	2	5	7	2
広島経済			1		3		2	
広島工業			1	2		2	3	
広島修道		4	1	1	2	1		1
広島文教女子					4	1	1	1
福山			2	1	1	1	1	
四国	0	0	0	2	8	3	3	2
徳島文理				1	4	2		1
九州・沖縄	0	0	0	2	8	3	3	2
福岡						1	3	

	1995 (平成7)	1996 (平成8)	1997 (平成9)	1998 (平成10)	1999 (平成11)	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)
北海道・東北	3	0	0	0	1	0	1	0
関東(一部除く)	4	4	2	1	0	4	0	1
{神奈川		1				1		
東京	9	10	10	8	25	5	9	17
慶應義塾		1		1		1		
駒澤					1	1		
上智						1		
専修	2			1	1			
創価	1				1			2
中央		1	1	1	3	1	1	
東海	1	1	1	1	1			1
東京農業		1			1	1	1	
東京理科		1	1		3		2	
東洋			1					2
日本	1		2	1	2	1	2	
法政			1		2		1	
明治	1	1			2			1
早稲田		2		1	1	1		1
中部	20	7	3	2	0	3	3	3
近畿(一部除く)	8	3	4	5	4	3	1	1
{奈良	6	1	2	4	3	1	1	1
京都	18	17	28	28	22	26	10	17
{京都産業	2	1	6	3	4	2	2	
{京都女子		1		3		6		1
{同志社	1	4	2	4	1	3		
{佛教	1	2		1	2	2		1
{立命館	6	6	9	7	9	3	4	8
{龍谷	5	2	6	5	4	6	3	6
大阪	25	22	35	28	24	17	13	9
{追手門学院		1	5	4	1			
{大阪経済	1	1	2	1			2	
{大阪工業	2			3	4	1		1
{大阪産業	2	6	4	2				1
{関西	3	2	4	4	4	4	2	3
{近畿	5	4	9	6	14	5	3	1
{摂南	4		1	1	1			
{阪南			2	1				1
兵庫	9	8	20	12	17	11	7	10
{関西学院	1	3	3	6	4	1		6
{甲南	1	1	1	1	2	2	2	
{神戸女子			1		1	1		1
{武庫川女子	2	1	2		7		1	
中国	16	7	26	14	13	22	10	14
{鳥取環境						11	3	7
{岡山商科	4		1					1
{岡山理科	1		2	5	7	2	3	
{広島経済	2		3	2				1
{広島工業	3	2	1		2			1
{広島修道	2		4	3		1		
{広島文教女子			1			1		
{福山	1	1	4	1				1
四国	3	8	12	3	0	0	0	4
{徳島文理		1	7	2				4
九州・沖縄	3	8	12	3	0	0	0	4
{福岡			2	2	2		1	

	2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)	2007 (平成19)	出現頻度
北海道・東北	1	0	0	0	0	
関東(一部除く)	2	1	3	0	0	
神奈川	1		1			13
東京	15	13	9	11	10	
慶應義塾			1			9
駒澤	2			2		14
上智			1			7
専修			2			14
創価	1					10
中央	1				4	20
東海	3			2	1	15
東京農業	1			1		14
東京理科	3		1	2		20
東洋	1			1		14
日本	1	4	2	1		24
法政		1			1	18
明治		1		1	2	18
早稲田			1	1	1	19
中部	7	0	0	1	2	
近畿(一部除く)	0	0	1	1	6	
奈良				1	5	16
京都	6	10	11	14	20	
京都産業	2	1			1	24
京都女子			2	5	3	17
同志社						21
佛教		1				11
立命館	1	1	3	3	9	27
龍谷	3	5	4	3	2	23
大阪	16	2	3	18	18	
追手門学院	1					11
大阪経済						16
大阪工業				3		16
大阪産業						11
関西	8			5	10	25
近畿	4		1	8	5	27
摂南						10
阪南	1					10
兵庫	5	9	6	8	24	
関西学院	1	2	1		6	20
甲南	2	1	2		4	21
神戸女子		1	2	2	3	12
武庫川女子			1	1	2	12
中国	10	13	14	9	10	
鳥取環境	4	7	7	2	1	8
岡山商科						10
岡山理科	3	1	1		2	18
広島経済	1			1		10
広島工業		2	3			15
広島修道	1					16
広島文教女子					1	10
福山	1				1	13
四国	2	1	0	1	0	
徳島文理	2			1		10
九州・沖縄	2	1	0	1	0	
福岡			2			10

史料紹介

松本深志高校における教育課程の実験的研究(1957年)その7

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

第77号・第78号・第79号・第82号・84号・86号につづき、新制高校における特別教育活動の位置づけを知るための史料として、長野県松本深志高等学校の『松本深志高校における教育課程の実験的研究』(1957年)を紹介する。

第86号では、調査と分析に基づいて作成されたH・R(ホームルーム)の計画表について紹介した。本号では生徒会活動に関するカリキュラムをとりあげる。

生徒会カリキュラムの性格

生徒会に関する計画表(カリキュラム)の前に、生徒会活動の指導に関する基本方針として、「生徒会カリキュラムの性格」「教師の指導について」「H・Rとの関連について」「とんぼ祭について」が示されている。

まず、生徒会カリキュラムの性格の前提として、以下のように述べられている。

生徒会活動に関して吾々の持つ具体的目標はこれを通して個々の生徒が歴史的人間として生長してゆくことにある。即ち、毎日毎日が歴史であることだ。生徒会活動は社会的価値創造の前史乃至は準備練習期であるという意味を止揚して、それ自体一回的歴史であり生徒にとっては絶対的価値である。ここに展開される彼等の生活は自主的であり、未熟欠陥をもちつつも、吾々を啓発せしめるものを多分に包蔵している。

従ってこの自主的な生徒会活動に関するカリキュラムと言ってもそれは当然教科のそれとは異なる面をもっており、このカリキュラムの軌道に於て集団輸送を計るというのではない。このようなカリキュラムに安易に盛られてしまう若人の群があるとしたら悲しむべきことである。

このカリキュラムも以上の点を考慮した、いわば生徒会活動に関する指導の目安であり、(b)の行事予定〔次々頁から紹介するカリキュラム表の「B 生徒会行事等予定」のこと〕も大まかな標識であり、固定したものではなく(c)〔カリキュラム表の「C 生徒部実施予定内容」、つまり生徒部の教師による指導予定〕もその時期における問題とこれに対する吾々の指導の方向を示すものである¹⁾。

つまり、生徒会活動は自主的なものであり未熟な部分や欠陥があっても価値をもつものであり、生徒会カリキュラムは生徒会活動の固定化することを意図しているのではなく、教師たちの指導の方向を示すものであることを述べている。

教師の指導について

生徒会活動に関する教師の指導は、主に生徒部によって行われる。また、1957年の4月からクラブ活動研究委員会(約10名)がつくられ、生徒部と緊密に連携して実情調査や指導を実施している。生徒部およびクラブ活動研究委員の基本的な指導方針は以下のようなものであった。

その指導の本質は「所謂指導という名に於て行われるものの不毛性」の認識と、あくまで「生徒に分って貰う」という気長な意識的執拗さをもつ根本原則に立脚するものである²⁾。

この活動の性質上生徒との相互的協力が最も必要であり生徒の積極的協力を得る為の具体的一方法として、コンパの利用、練習研究への参加が教師の側から積極的に行われる³⁾。

つまり、高圧的な指導ではなく、生徒といっしょにコンパやクラブ活動に参加しながら、「生徒に分かって貰う」ように気長に接するという方針である。

H・Rとの連関

また、生徒会活動とH・R（ホームルーム）の連関を重視することが以下のように示されている。

生徒会活動の充実発展の為には、役員を選出、共通問題、意見発生の母胎としてのH・R活動との有機的な連関が最も肝要であり、従って生徒会活動の指導については生徒部、クラブ活動研究会も常にH・R・Tと密接な連絡、共同意識の下に諸問題を分ち合い、相互環流を図って、生徒会諸問題の討議、役員選挙はもとより、決定事項の連絡説明等はすべてH・Rを通して行っている⁴⁾。

とんぼ祭について

とんぼ祭（記念祭）を生徒会活動の中心的行事として位置づけ、その趣旨をH・Rや各種のコンパ等で生徒に認識させることを重視している。

記念祭は本校に於て生徒会活動の集中的表現であり、各部の研究・活動の大きな目標であり、最大の仕事としての内容と意義をもっている。従ってその価値規定、内容如何が生徒会活動の質量を左右する点のあることを考え、学校共同体の危機意識に発した建設的協同作業としての歴史的由来や地味な探究的活動としての本来的な在り方は、H・Rや各種コンパ等を通して随時全生徒に認識せしめることを痛感し、これを行っている⁵⁾。

生徒会活動に関する教師の指導は存在していた

以上の生徒会活動カリキュラムの基本方針から分かるように、教師たちは生徒会活動における生徒の自主性を尊重しながら、クラブ活動を含む生徒会活動とH・Rとの連関を重視しながら、とんぼ祭の本来的な趣旨を生徒に理解させるなどの指導が重要であることを明記している。このことは、カリキュラム表の「C

生徒部実施予定内容」や「D 備考」の欄に以下のように書かれていることから分かる。「一般生徒に対しとんぼ祭の在り方とその参加について、〔生徒会の〕委員会を通し又直接に積極参加を要請」、「とんぼ祭準備の合理化を図り、学習の基礎的持続を怠らぬよう配慮」、「とんぼ祭の意義、あり方、その準備が学習と併行する様な合理的計画の樹立など指導⁶⁾」。

これまで、第77号・第78号・第79号・第82号・84号・86号と本号で、新制高校における特別教育活動の位置づけを知るために長野県松本深志高等学校の『松本深志高校における教育課程の実験的研究』（1957年）に記載されているホームルームや生徒会活動に関する調査やカリキュラム表について紹介してきた。7回にわたる史料紹介を通して、戦後初期の松本深志高校において、ホームルームについても、生徒会活動についても、生徒の自主性を尊重しつつ、教師の指導が重要な要素として位置づけられていたことがわかる。旧制松本中学以来の「自治」の伝統を意識しながらも、戦後初期の松本深志高校において、特別教育活動について、教師は調査・研究をおこないながら指導を行っていたといえるだろう。

注

- 1) 松本深志高等学校『高等学校普通課程における教育課程の実験的研究』松本深志高等学校、1957年、生徒会1頁。
- 2) 同前掲書、生徒会1頁。
- 3) 同前掲書、生徒会1頁。
- 4) 同前掲書、生徒会1頁。
- 5) 同前掲書、生徒会1頁。
- 6) 同前掲書、生徒会1頁。

〔I〕 生徒会活動についてのカリキュラム

月	A 学校行事予定	B 生徒会行事予定	C 生徒部実施予定内容	D 備考
4月	入学式 卒業式	新1年生に対する生徒会活動についての説明会 (生徒委員会、応援団) 入部勧誘演説会 2.3年新役員選挙 生徒大会 1年役員選出	1 新入生の新環境への導入・融和について生徒委員会、台同協賛会と連絡その案をたてる。(説明内容の整理、校歌練習の時間、入部前の見学期間の設定等) 2 新役員に対して学校長の要望・激励を含めての話し合いをもつ 3 郷友会顧問教官の決定及び郷友会責任者名簿作成。郷友会上級生に対する	生徒会諸活動開始の時期。第一歩が重要。新1年生は未だなれないので十二分に入らぬ、一般に度動的であり且つ環境適応に相当疲労もする。従って保健・衛生衛生上配慮を必要とする。勿論甘やかしては不可。
5月	憲法記念日 中間考査	談話会(校友一般) { 学園生活のあり方 清陵交歓会についての自由意見	1 部活動の台理的・計画的・運営 合宿生活等につき部責任者との話し合、部先輩との話し合、協力を求める 2 相互啓発相互探索による文化交流としての交歓会の意義・内容等につき委員会、各部長、個々校友と話し合 3 台宿の指導及び実状調査 4 入部1年生の保健及び生活調査	諸活動に油が乗る時期。 部活動の高揚、台宿の開始。 更に清陵交歓会が話題にのぼる。
6月	典尊休業 清陵交歓会	清陵交歓会の計画準備のため生徒委員会及び生徒大会を必要に応じて開く 清陵交歓会についての反省会(生徒委員会主催)	1 交歓会具体案の検討(日時、題目、班組織等) 2 徒歩班、自転車班等に対する危険防止具体策の徹底(安全教育と集団行動への配慮指示) 3 教師の係、部署決定(清陵交歓会) 4 各部活動状況及び部員調査	1 年生の入部者もほぼ固定する。 清陵交歓会の計画と実施期。

7月	<p>期末考査</p> <p>式</p> <p>夏</p>	<p>生徒委員会(とんぼ祭計画具体化)</p> <p>学芸協議会(とんぼ祭講師決定)</p> <p>クラスママムッチ</p> <p>壮行会</p> <p>音楽コンクール</p>	<p>1 夏休みに於ける各部の練習, 研究計画表作成とその指導</p> <p>2 登山・水泳についての危険防止</p> <p>3 登山に協力する山岳部のアラン等, 一般に徹底</p> <p>4 とんぼ祭の意義, 持ち方, 内容の充実について委員会・各部責任者と話し合い, その方向付けに資する</p>	<p>生徒会諸活動が校外にのび, 自由且自主的な活動が行われる時期で, これに対する諸種の助言指導も従って必要である。</p>
8月	<p>休業式</p> <p>始</p>	<p>生徒委員会(とんぼ祭案作成)</p> <p>学芸協議会(展覧会, 其他発表)</p> <p>運動協議会(運動会執行)</p> <p>応援団</p> <p>壮行会</p> <p>生徒大会</p> <p>とんぼ祭計画案の討議採決</p>	<p>1 教師の係・部署決定</p> <p>2 とんぼ祭の検討</p> <p>3 展覧会の持ち方・発表方法等について</p> <p>4 不足用具の校外からの借用及びその取扱い</p> <p>5 一般生徒に対してとんぼ祭の在り方とその参加について, 委員会を直し又直接に積極参加を要請</p> <p>6 とんぼ祭準備の合理化を図り, 学習の規則的持統を怠らぬよう配慮</p> <p>7 各班の組織及びその任務の単一化について</p>	<p>同上</p> <p>とんぼ祭への準備が具体化される時期。</p> <p>とんぼ祭の意義, あり方, その準備が学習と併行する様な合理的計画の樹立など指導。</p>
9月	<p>とんぼ祭</p>	<p>生徒委員会・応援団会合</p> <p>とんぼ祭執行 { 全校 }</p> <p>とんぼ祭反省会 { 各班 }</p> <p>各部</p> <p>各回の引継会をはじめ</p>	<p>8 会館について</p> <p>9 準備会宿, 応援団の整備について</p> <p>10 体験者としての教師が各反省会に参加</p> <p>反省記録の作成</p> <p>11 反省会出発点とし, 来年度への研究態勢・基本目標の設定(引継会を通して)</p>	<p>とんぼ祭準備の完成。その実施と, これに対する反省を通して引継会を海客影に行い, 深く学習及び諸活動に沈没する時期。</p>

10月	中間 考査	学芸・運動両協議会の新 編成及び新旧の引継 選挙管理委員会 生徒会新役員選挙公示 候補者立合演説	1 引継事項の整理 2 新協議会の計画立案、これに対する指 導 3 選挙事務の打合 4 正しい選挙意欲の高揚のための助言	生徒会其他各部の活動のリザーブシッ プが1・2年に引渡される新旧役員の交響 期。 以後の諸活動、学園生活に關連して選挙 の重要性が認識されなければならない。
11月	文化の 期 末 考 査 第2学期終業式 第3学期始業式	生徒会新役員選挙 学校長の承認及び面談 生徒会新旧役員引継会 合同協議会 生徒大会	1 生徒会新役員及び協議会、各部責任者 との話し合を通してその計画・考えをき くと共に、生徒会諸活動に必要な手続 (他校、其他校外団体との交渉など) 心得等をよく分らせる 2 新役員の融和・共同任務の自覚 4 旧役員の慰勞 3 新役員による最初の生徒大会としての 意味をもたせる	
12月	防 火 指 導 年末年始 休業	生徒委員会及び合同協議 会 諸委員会忘年コンパ	1 各種委員会、各部を通して果敢的に防 火に協力を求める 2 冬山登山について、山岳部長の話をき き生徒指導を行う あるいは校内放送も可 3 委員会を親しい集いにしてゆぐ意欲を 自然に高めるためにもコンパは必要	生徒会が新役員を中心に、新しい活京を 固めてゆく時であり、又運動部・学芸部 などが地味・平凡ではあるが、意志力と 情性におち入らぬ自覚をもった基本的保 習や研究の生活に入りつつ、学力を充実 する時期である。
1月	始 業 中間考査(2,3年) 3年期末考査 冬季 休業	学芸協議会 生徒大会 生徒委員会 合同協議会	1 各部活動状態を全体的にみる 2 この辺で生徒大会がひとつ欲しい (若し仮に沈滞があったら、共通の問 題の探求を通して) 3 来月予算審議の前提として、今年度予 算、会計、各部委員会の経理及び活動 状態、興済の検討・確認が大切	12月と同様の意味をもちつゝ 生活のなれから来るゆとりはよいが、と かく生じ易い安易態は、十分警戒されな ければならない時期である。

2月	<p>↑ ↓ 冬期休業</p>	<p>同上 生徒大会（新年度予算案 審議） 各部会合</p>	<p>1 予算配分の方法等、公正を期す 2 全校友の承認とその経済的支持の上に 成立する委員会、各部に、この事実を 強く認識すること 3 又校友の建設的批判を大巾に受け容れ る態度。この二点は一般に確定されて いるが、不断の配慮が大切である</p>	<p>生徒会活動の根拠でもあり、生徒会の一の 最重要問題である予算審議に、全校友が 強い関心をもつ時期である。</p>
3月	<p>1,2年期末考査 卒業式 卒業式 職員（校務分担）</p>	<p>生徒手帳作成（生徒委員 会） 合同協議会 生徒大会 各委員会、部などの送別 会</p>	<p>1 終業式前に各委員会、各部等が問題点 を整理して、夫々反省会をもち、同時 に新年度に於ける生徒会活動への準備 乃至協力の意欲を高めるよう配慮 2 新入生受け容れ態勢についての話し</p>	<p>新2年生は所謂中間層としての自覚と共に、他所慣れの意識をもち、新3年生は 残る1ヶ年に稀少価値を強調する立場に ありつつ、又最上級生としての責任を意 識してその生活の自覚的統一を求めめる時 期である。 生徒会正副会長、議長団等を除き、一般 役員は4月改選となる故、生徒会関係の 諸活動の継続発展・新入生の受け入れ態 勢の確立のためには、全校友的連帯に於 ける反省と引継ぎが特に必要とされる。</p>

体験的文献紹介(36)

— 『城右学園48年史』の編纂 —

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

城右学園の創立者・河野通禰太先生から4年にわたって漢文の素読を受けたこと、先生の口述『尚風放談』を編纂したこと、先生没後、学園紛争が起り没落した経緯は『体験的文献紹介』3、10、21(ニューズレター55号、62号、73号)に書いた。御恩になった河野先生令夫人の切なる願いでもある。直ちに河野十重子夫人を委員長とする旧教職員、卒業生からなる編纂委員会をつくった。すでに学園は文化女子大学附属杉並高等学校に移譲されていたので、この新設高校校長の了解を得て校内に死蔵された城右関係文書を調査させて貰った。幸い新設高校の校長は好意的で助かったが、古文書類は古教室に山積され廃棄寸前であった。事務的仕事が嫌いな河野校長ゆえ教務日誌などあるまいと思っていたら創立以来のそれが揃って在った。歴代の教務担当者が綴ったものである。また生徒の作文を載せた毎年発行の文集『芙蓉』が全巻揃い、また父兄あて通知の印刷物も豊富に遺っていたので史料集をつくる目処が^{めど}ついた。そこで編纂委員が各自の関心によってこれらの史料を判読し、月一回、故校長宅で検討会を開いて整理する。その際私(神辺)も出席して教育史の立場から史料の意味を解説し、これを4年間続けて一年ごとに『学園史史料』として4冊上梓した。『史料』は「父兄への通知」等の準公文書ばかりではない。遠足や学芸会等についての生徒の作文もある。よって編纂委員や卒業生に回想記を書いて貰って「史料」に載せた。河野十重子氏は創立以来の学園事情を表裏くまなく知っている。よってその時々感想を書いて貰って史料集に載せた。これらで無味乾燥の史料集に人の息遣いを感じさせる回想が加わった。さらに編纂委員を督励して時期別に教職員一覧表、生徒数、使用教科書一覧表等をつくり、また生徒の増加に応じて校舎を改築、増築している、その図面をつくった。ここにおいて私は章立てを考えた。

- 第 1 章 城右高等女学校創立
- 第 2 章 建設の十年(苦しい財政難の中の発展)
- 第 3 章 戦時下の城右(学徒勤労働員)
- 第 4 章 戦後の城右(食糧難の中での再建)
- 第 5 章 城右中学校・高等学校の発足
- 第 6 章 城右高等学校の発展
- 第 7 章 新体制の城右(河野校長死亡以後の学園)
- 第 8 章 城右高等学校の終焉

創立から終焉まで48年だから「48年史」とした。学校沿革史は通常10年単位か25年単位でつくられるから「48年史」は異色である。しかし委譲〔移譲?〕にせよ買収にせよ48年間で廃校になったのだから「48年史」でよいと思った。廃校になった学校の旧職員や卒業生がつくる沿革史は見たことがない。めづらしい貴重な学校沿革史になると思った。

この貴重な沿革史にはかつて編纂した『尚風放談』を重ねよう。これによっておみかんそう無味乾燥の記録に人間の血が通う。さらに想う。この学校がはじまったのは昭和のはじめ1920年代の東京西郊である。国鉄中央線沿線の田園地帯に住居ができて急速に都市化した時期である。その状況と城右高等女学校の関連を考察するために、『東京府史』『東京百年史』『杉並区教育史』を参考にした。

創立者・河野通禰太は明治24(1891)年、東京市麴町区で生まれた。父は直参旗本である。1876年の金禄公債条例で家禄が廃止されたので支給された公債で事業をはじめたが、ご多分に漏れず士族の商法で没落した。長男の通禰太は箱根の知人に奉公に出された。通禰太は土地の尋常小学校(義務教育)から高等小学校へ進んだ。成績がよいので雇主は小田原の県立中学校へ進学させた。しかし3年生の夏、東京の父母への思慕が昂じ、箱根から一路、東京の父母の家に逃げ帰った。後年雇主は優しくかつし中学までゆかせて貰って有難

かった。しかしそれに甘える自分がみじめで許せなかったと述懐している。東京に逃げ帰った通禰太は私立早稲田中学校の3年生に編入学した。

早稲田中学校3年間の生活は通禰太の人格形成に大きく寄与した。彼を歓喜させたのは出会った教師たちであった。まず歴史の浜田耕作、彼の東洋史全体からみた日本史の授業で通禰太は古代中国史の虜トリコになる。次に英語の吉江孤雁コ、後に早稲田大学の仏文科を創設した人だが通禰太は生涯、英語の翻訳を得意とした。だが何と言っても音吐朗々、松本浩の漢文の授業に陶醉し漢文教師の道を歩ませたことは特筆される。松本浩は大阪の藤沢南岳塾の出身、後に枢密院議長・平沼騏一郎のブレーンになり終戦の詔勅を書いた人である。余談ながら私（神辺）も大学院生の頃、無窮会（平沼の蔵書所。漢籍研究会）で松本浩先生の講義を並居る漢学者の末席で拝聴したことがある。短軀白髪しゃがん 音吐朗々の老人であった。

早稲田中学校を卒業した通禰太はさらに進学したかったが学資がなかったから府下西多摩郡の青梅尋常小学校の代用教員になった。生活を切りつめて百円をため、その金で早稲田の高等師範部に進学した。通禰太にお誂あつらい向きの「国語漢文及び歴史（国史・東洋史）」の専攻科があったからである。高等師範部では成績優秀のため特待生となって学費免除、卒業後、北海道庁立札幌第一中学校教諭、次いで神奈川県立第二横浜中学校教諭になった。これで生活は安定したが、校長や教頭と仲が悪くて喧嘩ばかりする。当人も公立中学校がいやになって東大文学部の支那哲学科に入学した。在学中、私立明治中学校で教鞭をとりながら大学の副手にもなっていたから学資、生活費に困ることはなかった。東大を卒業すると学習院の教員になった。給料も社会的地位も高いのだが、生徒が気に食わない。自分の家柄をたてに他人を蔑むと言うのだ。癩癩さげすをおこして学習院を退職し、いっそ私立中学校をたてようと思った。

たまたま豊多摩郡杉並町に水谷女学校という各種学校が校舎を建替え中であつた。設置者が都合で止めたがっているからこれを引き継いだらどうかという

土地の地主がいた。河野はこの話に乗って苦心^{さんたん}惨憺の上、1926(大正15)年、城右高等女学校を開校したのである。

さて学校創立者の教育観である。私はかつて『尚風放談』の聴き取り中、先生の教育思想は、と聞いたことがある。即座に「そんなものはない。俺のこれまでの人生が教育の考えだ」という乱暴な言葉が返ってきた。思えば河野通禰太は貧乏であった。彼はまた勉強好きであった。ゆえに子どもはすべて勉強好きだが金がないから学校に行けないと思っている。当時、東京の私立高女の月謝は6円から8円ぐらいだったが、城右は公立と同じ5円、その他の教材費や寄付金は一さいとらなかつたし、遠足その他の費用も最低限にした。片親が亡くなると授業料の半額を返したし、妹が入学すると妹の分はタダにした。教員の給料は下げられないから専任教員を最小限にし、定年の公立老教員に協力して貰った。一方、活力ある授業をするために大学院の学生を非常勤の講師に雇い学校行事にはなるべく参加して貰った。河野校長は全くの無報酬で、学習院の教員頃からやっていた日本大学と早稲田大学高等学院かけ持ちで漢文の非常勤講師をやり、かなりの収入を得ていたので、それを城右の教員給料にあてた。熱心な授業を見ては満足^{てい}の体であったが、試験の評価になると「あの生徒は親孝行だから点数をあげろ」とか、落第点をつけるなど無理難題を吹きかけて教員を困らせた。街中のおかみ^{まちなか}さん風の母親が来校すると機嫌よく相談に乗るが、権柄^{けんべい}づくのざあます^{どなり}婦人が来ると怒鳴散らした。まるで小説や芝居の直参旗本江戸っ子侍のようであった。天皇や国家体制について批判めいたことは言わなかったが、ご真影も奉安殿もなかった。「本校は建物が粗末でご真影は拝受できない。いずれ立派な校舎ができてから」という理由で拝辞したという。教育勅語は拝辞できないから儀式の際は修身教科書に載っているページを奉読したというが、そんなことができたのであろうか。

1937(昭和12)年、支那事変がはじまってから次第に軍国体制になるが、教務日誌その他の史料に組織的行動はあまり記録されていない。時折、「宮城外苑清掃」「傷病兵患者衣製縫」等の記事を見るが、例によっておつき合い程度の

ことと思われる。当時、強制された集団勤労作業も夏休みに生徒を数人ずつ校長宅に分宿させて家事を実習させた。すべて教育上の国家命令には逆らわず従うようにみせて教員も生徒も労力と金がかからぬようにした。しかし 44 年 7 月にはじまる学徒勤労働員は河野の思うようにはいかなかった。城右高女は三鷹の中西航空ほか中央線沿線の日南航空、理研電計、旭航空等の航空機部品工場に配置された。城右は教員の監督を常時行い、校長は生徒の勤労先も巡回した。私(神辺)は当時、東京都立第 2 中学校 4 年生で立川の飛行機組立工場に配置されていたが教員の監督は週に一回程度、校長教頭の巡回は皆無であった。空襲は頻繁ひんぱんになり、45 年 5 月の東京大空襲には城右の校庭に焼夷弾が落下したが、校長・教頭・宿直教員の奮闘で校舎への延焼を食い止めた。次いで講堂兼体育館が軍需物資集積所として接收され終戦を迎える。戦災を免かれた城右は生徒が集まり、戦後の学制改革の波に乗って発展拡大するのである。

『城右学園 48 年史』を書くに当って特に留意したことは戦時体制下における中等教育に対する政府、東京都の法規、通達類である。『近代日本教育制度史料』全 35 巻、『戦後東京都教育史』の中からそれらを見つけ出した。戦時下の教育史は未拓の分野であったから多くの収穫を得た思いであった。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

3月下旬、NHKの配信ニュースで、99歳の男性が17年かけ、放送大学の単位を取得して、卒業証書(学位記)を得た・とありました。82歳から放送大学(徳島学習センター)に入学して、心理と教育コースの単位を取得されたそうです。驚。報道内容によれば、「一区切りではあるが、勉強は続けていきたいです。大勢の人にお世話になったので社会奉仕をして、お返しをしていきたい」とのよし。まさに、人はパン(実利)のみに生きるにあらず、これもまた生涯にわたる自己研鑽の在り方といえるでしょう。生涯をとおしてエンドレスに学ぶ、そんな素晴らしい姿勢に、私も心から敬服します。(谷本)

少し前に書いたノートを整理していたら、帚木蓮生『ネガティブ・ケイパビリティ 答えのない事態に耐える力』(朝日新聞出版、2017年)について3年半前に書いたメモを見つけた(もしかしたら以前の「短評・文献紹介」で紹介したかもしれない)。作家帚木蓮生は詩人、ジョン・キーツが記述した「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉を、どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力、性急に証明や理由を求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力で、対象の本質に深く迫る方法であると述べている。なかなか研究が進まないときには、こんな概念もあったなあと思い出して、ほんの少しずつでも前に進もうと思っ直している。(富岡)

会員消息

3月下旬、私も3回目(ファイザー製)のワクチン接種を、地元・聖蹟桜ヶ丘駅前にある集団接種会場にて行いました。仕事終わりの平日19時に予約していましたが、思いのほか、自宅から数分たらずで会場に20分前に着いてしまい、問診手続きを経て実際の接種、そして接種後の待機を済ませ時計をみたら、19時前にはなんと会場をあとにしていました。スマホでのQRサイト上の予約では、かなりの人が当日の時間帯に予約している・と思っていましたが。おそらくは地元の自治体側も今回で3回目を迎え、ワクチン接種の集団会場の運営もスムーズな感じであったのかもしれないですね。まったくイライラと待たせることなく、滞りなかったです。3月末の時点で、東京では4割のワクチン接種率とのこと。(谷本)

勤務する大学のすべての講義が対面でスタートしました。本年度は、非常勤講師の授業数も増えて、その準備がたいへんです。本務校のほかにもいろいろな学校に行くと、校風や学生の様子が違って面白いです。ある大学では、女子学生の日傘率が高いことでしょうか。(山本剛)

新学期が始まり、昨年度とは全く違う授業を週に5コマ、新造して取り組まねばならなくなりました。授業づくりと実践の繰り返しはやりがいはありますが、いかんせん作業量が多く、その日暮らして付け焼き刃的にこなしてしまうこともあります。1年かけて、また何かコラ

ムにできるくらいの取り組みができれば、などと考えつつ、今はGWの到来を首を長くして待っています。(猪股)

私事ではございますが、この度、4年間お世話になった専修学校クラーク高等学院芦屋校を去り、姫路校に転勤することになりました。この4年間、子ども達、保護者の方々、同僚、地域の皆さんなど、多くの方にお世話になりました。本当にありがとうございました。

まだまだ「やりたいこと」「やってみたいこと」がたくさんあります。今後も「好奇心」と「探究」をテーマに、今後も教育活動を継続していこうと思います。変わらぬご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。(八田)

新学期授業は、所属部署の方針で最初の2回分はオンライン授業になりました。これは、履修登録が確定したあと、各教室の受講者数が試験定員(通常定員の約60%)以内になるように調整することを目的とした措置です。このような慎重な準備を経て、第3回からは対面授業を基本に実施しています。新3年生は、入学から2年間はほとんどの授業がオンラインであったためとくに実習系の学生は物足りなく感じていたようなので一安心です。

旧制高等学校記念館(長野県松本市)の夏期教育セミナーは、コロナのために2020年は中止、2021年はオンライン実施でしたが、2022年度は対面で開催される予定です。ただし、コロナ対策として従来1泊2日間の日程だったものを半日間に圧縮して実施されます。もうすぐ正式発表がありますが日程は9月3日(土)の見込みです。予定を空けておいていただけると嬉しいです。(冨岡)

昨年度末から今年度初めにかけて、職場関係でいろいろ立て込んでおり、原稿を出せず失礼いたしました。

私が所属していた早稲田大学大学史資料センターは、組織再編により4月1日付で早稲田大学歴史館と統合され、名称も早稲田大学歴史館(東伏見アーカイブズ)となりました。その歴史館では、4月23日より私が担当した春季企画展「早稲田の女子学生 今昔物語 since1921」が開催されております。早稲田が初めて女子聴講生を受け入れた1921年から100年間の女子学生たちの歴史を描き出しております。お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りいただければ幸いです。(田中智子)

会期：2022年4月23日(土)～6月5日(日) 10:00～17:00

休館日：水曜日・祝日(ただし、5/18, 25は開館) 料金：無料(予約不要)

会場：早稲田大学歴史館 企画展示室

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学 早稲田キャンパス1号館1階

お問い合わせ先：reki-d@list.waseda.jp(担当：田中)

ホームページ：<https://www.waseda.jp/culture/archives/>

早稲田大学歴史館春季企画展

早稲田の女子学生 今昔物語

since 1921

2022年

4.23 (土) → 6.5 (日) 10:00~17:00 入場無料

主催：早稲田大学歴史館(旧：大学史資料センター) 会場：早稲田大学歴史館 企画展示室



「数少ない国文の友を戦争に送る会」(1944年)



「女子学部(仮称)設立機密書」(1938年)

早稲田の女子学生

今昔物語
since 1921



「早稲田高等女学講義」(1923年)

今から約100年前の1921年、早稲田大学は初めて女子の聴講生を受け入れました。その頃は男女で教育制度が異なり、女子に門戸を開く大学はごく少数であった時代でした。1939年には、女子を学部の正規学生として受け入れ、今日に至るまで多数の卒業生を輩出してきました。

本展覧会では、エピソードや写真、統計データを用いながら、100年前から現在までの各時期の、早稲田の女子学生と彼女たちを取り巻く状況を焦点をあてていきます。

※展示資料は都合により変更となる場合があります。



「講義風景(早稲田工手学級建築科)」(1938年)

会 期：2022年4月23日(土)～6月5日(日)
会 場：早稲田大学歴史館 企画展示室
主 催：早稲田大学歴史館(旧：大学史資料センター)

開館時間：10:00～17:00 入場無料

休館日：水曜・祝日(ただし、5/18,25は開館)

※ご来館の際は、ウェブサイトでも最新のスケジュールをご確認ください。

交通のご案内

東京メトロ東西線「早稲田」駅 2・3A・3B 出口から徒歩5分
都電荒川線「早稲田」駅から徒歩5分
JR山手線・西武新宿線「高田馬場」駅(早稲田口)から
都営バス「早大正門」行 終点下車徒歩1分

お問い合わせ先

早稲田大学歴史館(旧：大学史資料センター)
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学 早稲田キャンパス1号館1階
Tel.03-6380-2891(平日9:00～17:00) E-mail:reki-d@list.waseda.jp
<https://www.waseda.jp/culture/about/facilities/rekishikan/>



本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。